

Kawasaki 美術館  
金山平三の世界



《菊》 1935-45 (昭和10-20)年 37.4×45.4cm 油彩・板 川崎重工業株式会社蔵

## 独自の掠<sup>かす</sup>られるようなタッチで、 巧妙に描かれた花瓶の菊

金山にとって、静物画という分野は得意であったようだ。点数も風景画以外のジャンルとしては多い方である。内容も皿の上に果物や野菜をのせた一般的なものから、魚二匹だけをのせた独得のものまでさまざま存在する。その中でもとりわけ花の絵は代表格で、中央画壇の画家であることを自負していた金山が二期集的に出品をしていた帝国美術院美術展覧会、略して「帝展」でも全十五回開催中に花を描いた絵を計六点点出品し、うち二点は宮内省に買い上げられた。愛好者も多くいたようで、当時の雑誌に掲載された帝展評などでも金山の花の絵はおおむね好評であったことがうかがえる。

さて彼独自の掠<sup>かす</sup>られるようなタッチで巧妙に描かれた本作だが、よく見ると左の方の花が萎れている。一方、花を生けた花瓶のつややかな質感からは、むしろこちらの方に金山が惹かれていたのではないかとさえ思わせる。ここにこそ、旬の花と枯れた花をともに描くことでこの世のはかなさを示すオランダフランドル絵画の「ヴァニタス(生のはかなさ)」にも通ずる、金山のリアリスティックかつ特異な側面をかいま見ることができよう。

(兵庫県立美術館学芸員  
相良周作)



### 金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。